

・た 1925年生れ
 ら 哲学者。『葬』など
 は 『葬』に著書あり
 うめ 著書あり
 けし 著書あり
 ま 著書あり
 著 著書あり
 た 著書あり

格や思想に迫っていく。

親鸞の「出家の謎」「法然

門下に入った謎「結婚の謎」

「悪の自覚の謎」と、四本の

柱をたてて親鸞の謎を解明す

る。言い伝えは玉石混淆だ

が、その言い伝えのあるところ

から史実は生まれてくる。

著者は高齢にもかかわらず、

親鸞の足跡を踏破している。

それゆえに彼の隠されていた

姿が浮かび上がってくる。

古代ギリシア語に「ア・レ

ーテイア」という言葉がある

ことをふと思い出した。「ア

」は著者の知識の

きた人生の深さ

なろう。わたした

初と違つのは言葉

心からだが、それ

ることができ

ることができ

る。このことは人

考えるのだが、著

書の姿を残された

証拠から、その人

(作家 佐藤洋二郎)

辺見庸著

霧の犬



(鉄筆・1944円)

・よ 1944年生れ。作家、詩人。著書に『眼の海』など。

三つの短編と書き下ろし長

編「霧の犬」が収められてい

る。「野の果てか海の果てを、

ふたりして裸でゆらゆら流れ

ていた」「カラスアゲハ」

とはじまる。「かれはふかい

水のなかにいる心地がした」

(「アプザイレン」とはじ

まる。「霧であった」(「霧

の犬」とはじまる。世界が

朦朧としている。実のところ、

この幻燈のような二冊の本が

映し出す世界は、はじまりも

おわりもさだかではない、生

と死の境も溶けてなくなつて

いるよつである。「死者だつ

て夜にはどこかへと泳いでい

こうとするものだ」(「カラ

スアゲハ」という。いつか

ら? 3・11のあの日から?

いや、そうではないよつだ。

3・11の前からずっとそうだ

つたことに気づいていなかっ

ただけのことに、ようやく気

づいたよつだ。そこでは歌が

流れている。それは絆を歌う

合唱からは遠い孤独の歌のよ

うである。見失われた言葉は

くだけて、ゆがんで、ずれて、

どここある。声は発するもの

ではなく、のみこむものよ

うになつている。「私」は私

であると同時に、「ん」であ

り「犬」であり「あ」であ

り「て」でもある(霧の犬)。

生と死のあわいで男と女は交

わる、交わるとはそもそも生

と死のあわいの営みなのだ

う、上になったり下になつた

り、足を洗い肝を洗いあつた

り、男と女は生きているのか

死んでいるのか、「なんだか

これからえらいことがおきる

よな、いやいや、なんもおき

んよな、もうおわつてしもた

よな」「まんげつ」、そ

んな揺らめく世界を、「霧は

ながれた。ふしだらにながれ

た」(「霧の犬」。幻であ

ると同時に現実でもあること

の空恐ろしさがながれてい

く、命がながされていく。

そう、不穏で空恐ろしい何

事かを辺見庸は確かに語って

いる。3・11後の世界に向け

て、ありきたりの言葉では言

いようのないアノコト、みな

が見ぬふり知らぬふりをして

いるソノコトを。ながれなが

ら、ながれに抗して、命がけ

で、ゆらゆらと、がくがくと

言葉を探して刻んでいるの

だ。(作家 善信子)

を向けて、ページの最下段に

を出していく。だから格差を縮

(新宿書房・2484円)

(女書房・5940円)